

1945～1953 年の‘在日’マイノリティー運動の 研究現況と課題

朴 玟宣

1. はじめに

今回の報告は、論文を書くための基礎的な作業として、色々な問題意識を設定するための報告であるため、資料をあまり使用できていない。今後、さらに研究していくためには、資料を使わなければならないと考えている。

近年、新聞で報道される日本社会の突出した‘発言’と‘行動’は、韓国社会内で大きい波紋を起こしている。日本小泉首相の靖国神社参拝の問題、日本国憲法第9条の改正推進の動き、有事法制定などは、現在右傾化している日本社会の雰囲気を読める良い例であると思う。

日本の右傾化傾向は、単純に今の時期から始まったのではない。日本社会の右傾化は、日本だけではなく、韓国、中国のような東アジア地域の問題とも結びつけていることであり、1945年敗戦を基点として、‘戦後体制’の新しい国家として出発しながら、片付けなかった‘戦前’の問題が右傾化の原因になっているのである。片付けられていないままの過去を後ろにして、‘平和国家’というイメージの裏に隠していることは、‘戦前のミリタリズム’日本との連続性だといえる。

現在、日本には様々な集団としてマイノリティーが存在している。よく知られている通りに、在日朝鮮人や沖縄人やアイヌなど、色々なレベルでマイノリティーが存在している。日本の社会でマイノリティーがいるということは、それはマイノリティーだけの問題ではなくて、逆に見れば、それが日本の社会を見えるようにしてくれるものだと考え、マイノリティーを中心にして報告をすることにした。

今は具体的な題目ではなく、色々なことをまとめた題目だが、時期を1945年から1953年までとした在日マイノリティーの運動の研究状況と課題という形になった。中心的な課題として在日本朝鮮人連盟、それが在日朝鮮人の運動団体の始まりとなるということなのだが、それとともに沖縄人連盟ということ

を中心として、日本の在日マイノリティーということについて報告したいと思う。

まずは題目で、‘在日’としてコロンを使っているが、それは私自身の考えで、マイノリティーというのは、沖縄人のマイノリティーと在日朝鮮人のマイノリティーとは、同一ではないからである。在日朝鮮人は、もともと日本人ではないから、‘在日’ということをつけるのが当たり前かもしれないが、なぜ沖縄人について‘在日’ということにしてマイノリティーとつけたのか、それはやはり沖縄人も、もともと在日朝鮮人と同じように曖昧な存在であるということなのである。もちろん国際的には日本人とされているが、彼らの中に本当に自分が日本人か、ということから、‘在日’という感覚があるのかもしれないと思い、‘在日’ということばをつけた。

今の日本は、戦後民主主義とか人権とか、平和とよく言われているが、その裏に隠していることの様々な問題点の一つとしてマイノリティーの問題がある。沖縄人と在日朝鮮人という問題が、最も核心的に戦後日本社会を見せてくれると思う。つまり、沖縄人と在日朝鮮人は1945年を基点として日本で自分の運動を通じてアイデンティティを形成していくことになる。この運動というのは、自分が置かれている位置、すなわち日本社会の中で「他者」、英語では *the other* ということだが、そういうマイノリティーという問題が、主体と、主体ではない人を考えることなのではないかと思い、その表現を使った。「他者」という位置からどのような形で自分を定義していくのかを、沖縄人と在日朝鮮人の問題は、よく見せてくれるのではないかと考えている。

在日朝鮮人の場合には在日朝鮮人連盟、韓国語では「チョウリャン（朝連）」というが、それを中心にして運動を展開してきたし、沖縄人の場合は沖縄人連盟を中心として、1945年から1953年にわたって運動を展開していくことになった。1945年から1953年に至る時期には、このような過程の中で、日本の

社会の中では、現代もそうであるが、少数民族、すなわちマイノリティとして沖縄人と在日朝鮮人の運動が、自然にアイデンティティを維持するための運動から形成するための運動に変わっていく。戦後の中では、日本政府、GHQ、韓国、沖縄など多様な行為者の中で、新しい主体として自分を位置づけようとする姿がマイノリティ運動をすることから言えると思う。このような運動史を通して、在日朝鮮人と沖縄人が、日本社会の中でマイノリティとして位置づけられる過程を見ることが、同時に、当時のGHQ占領軍と日本政府との関係、当時の状況の中で日本共産党のような社会主義系列の運動団体との関係、本国と沖縄本島の関係など、多様な要素を眺めることができるのである。また、このような関係の中で、運動を通じて、沖縄人と在日朝鮮人がどのようなアイデンティティを作っているのかがよくわかるようになるはずである。

2. 現行研究検討

1945年から1953年までの‘在日朝鮮人連盟’

ここでは1945年から1953年にわたって在日朝鮮人の連盟と沖縄人連盟の運動に関する研究の現況とこれからの研究の課題について簡単にまとめることにしたいと思う。現代でも様々な研究者から色々な研究が出ている。1945年から1953年にわたって、‘在日朝鮮人連盟（朝連）’を中心とした在日朝鮮人の運動は活発な研究を見せており、沖縄人についての研究も成り立っている。しかし、在日朝鮮人の運動と沖縄人の運動とは、それぞれの領域として二つに分かれて研究が進んでいる状況であり、二つの運動団体を比較分析した研究はまだ成り立っていない。ここで手短かに‘沖縄人連盟’と‘在日朝鮮人連盟（朝連）’の運動について整理したい。

1945年から1953年までの運動過程は、‘在日朝鮮人連盟（朝連）’と‘沖縄人連盟’の研究においても、最も核心的な時期だと思われる。この時期に関する研究は多様な主題をもって展開されてきたが、最も注目すべき研究者として、在日朝鮮人運動史に関しては、梶村秀樹と朴慶植が取り上げられる。梶村秀樹は1945年から1953年にわたった在日朝鮮人の研究で、在日朝鮮人に付与された二つの課題を論じている。一つは国家建設及び解放運動であり、二つ目は在日朝鮮人の生活権擁護運動である。すなわち、本国民衆の政治生活を含んだ大きな立場での

解放運動の参加と在日朝鮮人の生活と人権を守る闘いという二つの課題を、在日朝鮮人運動の基本的な性格として定義しているのである。

梶村秀樹は在日朝鮮人運動を1945年から1965年という限られた時期の中で、3期の時期区分を設定しているが、本稿では主要な時期として第1期と第2期のみを取り上げることとする。第1期は解放直後の在日朝鮮人運動で、1945年の8月15日から1950年の朝鮮戦争（韓国戦争）の前までの時期である。梶村はこの時期を‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’の結成を中心にして、解放直後に在日朝鮮人が主体的に運動に参加する過程として把握している。当時‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’を在日朝鮮人運動において唯一の大衆団体として規定している。梶村秀樹は解放直後、在日朝鮮人の動きを大衆の‘日常’という観点から把握している。‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’を中心とした運動は、単純な民族運動ではなく、民衆団体という性格を持っていたと考えている。民衆団体として‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’は在日朝鮮人の日常生活に目を向けたと梶村秀樹は把握している。1946年までの帰還運動と、大衆生活、教育の問題等を述べ、取り上げながら、それを全部まとめて民衆団体としての性格をあらわしていると言い、さらには、日本社会との関係がどのように成り立ったのかを分析している。

このような視点から、第2期の1950年から1953年に至る朝鮮戦争時期には、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’が1949年に解散されて、その後を‘在日朝鮮統一民主戦線（民戦）’（韓国では「ミンジョン（民戦）」という）が引き継ぐのである。‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’の性格を引き継いだ‘在日朝鮮統一民主戦線（民戦）’は、朝鮮戦争をきっかけに、以前とは異なる政治的運動に変化する。梶村秀樹の議論は、当時の在日朝鮮人の運動分析のフレームを、日本社会の差別や抑圧という立場に限定せずに、一歩進んで、解放と朝鮮戦争、日本共産党、GHQまで分析のフレームを広げた。

しかし梶村の議論は、大衆運動として把握された‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’の運動が、どのように外部状況と繋がれて影響を受けたのかが明確に現れていない。大衆運動として日本共産党と連携して日本社会にも大衆運動として波及効果をもたらしたと分析しているが、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’と日本共産党の関係が明確に設定されておらず、ただ社

会主義運動の系列としての関係のみを設定しているのである。また GHQ の在日朝鮮人の認識に対する議論は足りない。GHQ の日本占領が在日朝鮮人にどのように受け入れられたのか、解放を意味したのか、それとも、また違う占領として受け入れられたのか、という部分は、以降の在日朝鮮人の運動史において変動の要因になるにも関わらず、議論が十分に成り立たなかったのである。なおかつ、1945 年以降、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’と本国との関係設定に関する説明になっていない。

‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’にとって、本国（または祖国として朝鮮）との関係は、重要な変動の要因になる。すなわち本国で起きた 1948 年の済州 4.3 や、1950 年の朝鮮戦争は、在日朝鮮人と本国の断絶を引き起こすきっかけとなつて、これを基点として在日朝鮮人の運動が政治的な運動へと変貌していくことになる。この過程を重点的に察することで、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’を中心にした在日朝鮮人のアイデンティティ維持運動の展開と、彼らの日本社会での動きが、より鮮やかに捉えることが出来ると考えている。

他の研究者として朴慶植を取り上げることが出来る。朴慶植は強制連行に関する調査から研究を始めて、1980 年代の初め頃に、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’の全国大会の議事録とともに、民衆新聞や解放新聞などの新聞を資料集として公開した。このような資料を土台にして、在日朝鮮人運動史に議論を展開したのである。朴慶植は‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’で展開した運動を、日本の国家権力と社会的な差別に対して抵抗する姿を強調しながら議論を展開している。（朴慶植『解放後、在日朝鮮人運動史』、三一書房、1989 年）このような研究は日本政府の在日朝鮮人差別政策に対する‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’の大衆運動を理解することに適当な視角を提示している。しかし‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’の性格に、日本に対する抵抗や反対運動を強調しすぎた傾向があつて、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’初期の日本政府との共助関係や日本社会に適応しながら「定住化」した傾向を見逃している。また、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’の団体活動を、日本社会あるいは日本政府に対する抵抗の側面で把握するあまり、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’初期の本国志向的な性格や、意図的に日本社会から離脱した傾向を見逃した結果を生んだと思う。日本の支配と抑圧される在

日朝鮮人のみを強調しているので、在日朝鮮人の中で起きている多様な動きも見逃したのである。

そのほかにも、1945 年から 1953 年までの朝鮮人運動について研究が出ている。代表的な研究として、解放直後の在日朝鮮人の本国帰還の過程と統制構造に対する研究（崔ヨンホ、1995）、GHQ と SCAP の対在日韓国人政策に関する研究（金太基、1998）を挙げておく。

‘沖縄人連盟’の展開

次に沖縄人について整理する。沖縄連盟に関する研究者として、富山一郎が挙げられる。富山は琉球処分から現在に至るまでの沖縄に関する研究を展開しており、沖縄研究を通じて植民地状況の下における日常生活の監視と統制、暴力ということを鋭く分析している。特に、1945 年から 1953 年に至るまでの沖縄の運動において、‘日本人になるということ’を通して、当時の運動を説明しているのである。1945 年から 1953 年に至る沖縄の運動は、‘沖縄人連盟’を中心に展開されてきており、その中で特に沖縄出身者という言葉を使って設定している。すなわち沖縄人と日本人という存在は、沖縄出身者と沖縄民衆の中で、具体的な歴史として形成されたということを主張しているのである。富山は沖縄運動の展開を 4 つの時期に区分している。それは、第 1 期は 1924 年‘沖縄人’として蔑視をされる社会的状況の中で、自分が‘沖縄人＝琉球人’というのを誇らしく思いながら展開される運動時期、第 2 期は 1937 年戦時体制で展開される沖縄人‘生活改善運動’を通じる改善の対象になる自分を‘日本人’で同化させようとする動きが展開される時期、第 3 期は 1945 年以後に日本共産党と連動して少数民族としての自分の位置を認識して、民族として闘いに進む運動時期、自分を‘沖縄人’として認識している時期、第 4 期は 1950 年以後の‘復帰運動’に転換する時期、また、日本人として自分を認識する時期、の 4 期の時期区分となっている。

一般的な議論として第 3 期に当たる 1945 年からは、沖縄人運動において「昏迷の時期」とか「虚脱の時期」として、あまり相対的に注目を浴びなかった。それは日本共産党の影響の下で、沖縄独立論を通じて、沖縄運動が屈折されたと思う視角が強いからだとして分析している。しかし富山は第 3 期に注目しつつ、‘沖縄人連盟’の、沖縄人に対する疑問を提示した

のである。‘沖縄人’という言葉に凝縮される一つの存在としての‘沖縄人’ではなく、多様な存在としての‘沖縄人’を設定している。沖縄出身者における連続性の中で、沖縄出身だとか、沖縄人の自分の問題として分析を試みて、日常生活との関係性の中で、沖縄人がどのように自分の運動を導いて進むのか、その間での他の団体との連携過程を説明している。富山の分析の中では、‘沖縄人連盟’の結集軸である沖縄人というのが、結局、日本共産党の沖縄独立運動論ではなく、様々なバイアスを含むこととして、そのバイアスは‘沖縄人連盟’を構成する沖縄出身者の多様性が現れるのではないかと認識している。

このような過程を通じて、‘沖縄人連盟’から沖縄人協会に解消される過程がある。1945年から1953年にわたった、富山の‘沖縄人連盟’に関する分析は多様な動きとして運動を捉えているが、その中で成り立つ各運動団体と、日本政府、GHQ 占領軍、そして沖縄人内部の認識の差を見せることが出来ないものである。特に‘沖縄人連盟’が日本本土で沖縄出身者を中心に成り立った団体ということから、本土での沖縄人の意識の流れは見せてくれているが、沖縄本島での動きとは連携していないことは、限界であると思う。すなわち沖縄出身者と沖縄島と民衆との関係は現れていないし、運動団体の多様性というのが、結局本土内で、沖縄出身者の経験のみから語られているという限界をもっているのである。「日常」の領域に分析の焦点をあわせているので、その中で外部的な要因としての朝鮮戦争と沖縄島での問題や、日本共産党との関係設定の問題が、漠然と言及されているだけなのである。それが富山一郎の分析している‘沖縄人連盟’の問題だと思う。

朝鮮戦争と日本の関係

朝鮮戦争は、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’と‘沖縄人連盟’の運動において、新しいターニングポイントをもたらした。在日朝鮮人の運動において、朝鮮戦争は、本国との関係が断絶されるきっかけとして作用しつつ、運動が政治的に変化するきっかけとなったとも言えるのである。‘在日朝鮮統一民主戦線（民戦）’の「祖国防衛委員会」を通じて、直接に日本の中で、米軍基地に反対する闘いを展開して、武装闘争などに転換するきっかけになるのである。沖縄も朝鮮戦争を通じて本格的にアメリカの軍需物資

を調達する基地として転換している。この過程で運動も日本への復帰運動に転換する時期と把握することができる。このように朝鮮戦争と日本の関係に関する研究は、韓国では南ギジョンという研究者が代表的だといえる。南ギジョンの論文では、日本が朝鮮戦争によってアメリカの基地局になったと分析している。1945年以降に戦後処理の過程において、日本は軍事力を持つことが出来ないという規定を通じて戦後の新しい平和国家として象徴化したが、朝鮮戦争を通して、平和国家としての日本に変化をもたらすことになったのである。表面的には軍事力を持つことが出来ないのだが、内部的には、アメリカとUN 協力という名分の下で、武装することができる道が開かれるようになったと分析している。

南ギジョンの論文では、日本が表面的に平和を志向するのに忠実だったが、暗黙的に日本の国民と、知識人が、基地国家化する状況を認めていると分析している。（南ギジョン「朝鮮戦争と日本：‘基地国家’の戦争と平和」『平和研究』第9号、高麗大学校平和研究所、2000年）しかし果して日本の中で、日本国民と知識人が基地国になることに暗黙的な認定で一貫したのかという点については扱われていないのである。朝鮮戦争を基点として変化する戦後日本の姿とともに、在日朝鮮人と共産主義運動をする日本人の立場、また多様なオピニオンリーダーの言説が扱われなければその関係が明確には出来ないと思う。

3. これからの課題

問題の設定

1945年から1953年にわたった日本社会でのマイノリティー運動に関して扱うためには、これからもっと深い研究が必要である。本稿では、行為者の関係を中心にした問題を設定してその関係を分析したいと思っている。GHQ と在日朝鮮人、沖縄人との関係について、色々な学者たちが研究をしているが、私は GHQ と在日朝鮮人、沖縄人はお互いにどのように認識しているのか、ということを考えている。関係というのは、自分がいたら相手がいなければならぬので、お互いに何か影響をされたりしたりする関係だと思う。既存の研究では GHQ の在日朝鮮人、沖縄人に関する政策の研究が活発だが、それは GHQ の観点から研究をしてきたことになる。その観点から見ると、在日朝鮮人や沖縄人がどのように

GHQ に反応したかが見えないので、私は在日朝鮮人や沖縄人は GHQ をどのように認識していたか、ということをもう少し調べていきたい。在日朝鮮人と沖縄人の運動団体の内部では、GHQ をどのように認識していたか。それがどういう運動として現れるのか。その問題になると思う。これに対しては、色々な形の資料を調べてみて検討しなければならないと思っている。

次に、日本共産党と在日本朝鮮人連盟、沖縄人連盟との関係だが、日本共産党と‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’と‘沖縄人連盟’が一緒に動いた時もあったが、日本共産党の社会運動に参加する大衆団体と認識された在日朝鮮人が、1945 年の日本の状況が変わったことにより、その時点から運動団体として持っている問題意識が少し違ってきて、だんだん日本共産党と分かれることになる。ここで私が気になったのは、現実的に運動とつながりがあって、そこから色々な形で運動が展開していくので、運動団体として、それぞれの問題意識を明確にする必要があるのではないかということである。そのことについても、新聞などの資料を通じて確認する必要があると思う。日本政府の沖縄人と在日朝鮮人との関係は、この時点は沖縄人と在日朝鮮人が違う道を歩くという時期になるのだが、日本政府は在日朝鮮人と沖縄人をどのように認識していたかを考えてみると、沖縄人と在日朝鮮人に対する日本政府の認識は、やはり政府の政策として現実的に現れることになるが、在日朝鮮人と沖縄人に対する政策はそれぞれ違ったものだった。外国人登録や色々なことがあり、韓国人は日本の社会の中では差別される、抑圧される、という考えを持つことになると思う。それで日本政府の沖縄人と在日朝鮮人に対する政策の違いが、それぞれの団体にどのような影響を与えたのか、ということ、資料を探しながら考えてみたいと思う。そして、本国または本島、本国とは、在日朝鮮人に対しては朝鮮ということになるし、沖縄人に対しては、沖縄ということになるが、その関係を少し考えてみたいと思う。

沖縄人と在日朝鮮人の運動は 1950 年を基点として変化することになる。沖縄人は、1950 年以前には、独立という要求が強かったのも、そのときは自分が琉球人とか沖縄人という感覚が強かったが、1950 年以降は復帰という運動に変わることになる。それは、沖縄の島で政治的、社会的な変化があったので、そ

ういうプロセスになったのではないかと私は考えている。在日朝鮮人も民衆運動から政治的な運動として変化することになるのだが、またそれが本国とか本島という関係と繋がりがあって、沖縄人でいえば、沖縄本島が、1950 年を基点として朝鮮戦争が起きて、アメリカの基地という拠点となって、それとつながりがあるのだと考えている。在日朝鮮人は、やはり本国の問題として朝鮮戦争と繋がりがあったと思う。ここで本国とか本島という間での関係をもつことには、朝鮮戦争が影響されている側面があると思うので、やはり朝鮮戦争をよく察する必要があると思い、それがどのように在日朝鮮人と沖縄人の運動に変化を与えるのかということを考えてみたいと思っている。

研究方法

論文を書くときに関する問題だが、ここで研究の方法として、文献資料と口述資料とを挙げたが、やはり文献資料を中心にしてみたいと思っている。特に‘沖縄人連盟’と‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’が発刊する機関紙や新聞を中心に資料を調べてみたいと思っている。‘沖縄人連盟’と‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’の役員経験者が書いた回顧録や自叙伝、そのような文献資料も、歴史的な資料では足りない部分を補完してくれると思い、挙げてみた。口述資料というのは、文献資料で足りないところを補完することに使いたい、私が研究しようとする時代と現代とは、少し距離が離れているので、口述資料を集めるのは、少し難しいかもしれない。

資料発掘と分析問題

それで新しい資料として文献資料を探し、沖縄人連盟の活動に関する資料は、沖縄人連盟の総本部の機関紙として、『自由沖縄』という雑誌があり、1 号から 29 号まで手に入っていて、分析しなければならないと思っている。同じ団体が九州本部で出した『自由沖縄九州版』が 1 号から 11 号までになる。‘沖縄人連盟’を研究するときに、一番、日本に対して抵抗するとか独立しようという思いが強かったところが、兵庫県だが、その本部からの機関紙として、『自由沖縄関西版』というのがあるが、1 号から 2 号までしか出ていない。それを手に入れるのが研究の一番最初の問題で、他にも『沖縄新報』、『沖縄タイムズ』などを中心として、沖縄人の動きを把握す

ることが一番重要だと思っている。この資料は沖縄の那覇市の市庁に史料館があって、そこにまとまっております連盟の運動の流れを捉えることができると思う。

‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’の連盟会の活動に関する資料は、PRANGE 博士という人がまとめた資料集である PRANGE コレクションを中心として見たいと思っている。これは日本とアメリカの Maryland 大学で、マイクロフィルムとして所蔵されていることを確認したが、日本で GHQ の検閲制度が施行された、1945 年から 1948 年までの色々な機関紙や新

聞などをまとめたもので、それが一番重要な問題になると思う。

朝鮮発刊新聞記事の目録は、1945 年から 1950 年までの韓国で出た新聞の記事をまとめた資料集だが、1945 年から 1947 年までは ‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’という団体に関して名前が出ているが、1948 年以降は、‘在日本朝鮮人連盟（朝連）’に関する記事は出ていないことが確認された。そういうところを中心にして、自分の考えを展開していきたいと考えている。

◇ 質疑応答

フロアー（お茶）：戦後の占領期と朝鮮戦争期ですね。この時期におけるマイノリティーの問題を取り上げることによって、何をどう明らかにするのかというところが一番の問題だと思います。たとえば、二つの団体は必ずしも目的を同じにしているわけではなく、状況はよく似ていますが、一方では在日の問題であり、一方では日本ではない沖縄との関係をどのように在日の沖縄人が考えるかという問題で、マイノリティーといえどマイノリティーなのですが、運動のベクトルとして質が違う気がします。これを比較することにより、何をどう明らかにしたいのか教えていただきたいと思います。それから、ブラングコレクションについても教えてくださいませんか。

報告者：1945 年に日本が敗戦になったとき、戦前と決別して戦後改革を通じて新しい国づくりを行い社会が変わります。ですが、戦前・戦後という言葉のように完全に分かれたとは思いません。そこから問題を考えると、戦後の平和国家、民主主義として持つ日本のイメージの裏に、在日朝鮮人と沖縄人の動きが見せてくれるのは、戦後と別れていないという日本があり、その中で差別され、自分のアイデンティティーを認められない状況があります。その視点からするとマイノリティーから日本の裏側を見られると思ってます。

フロアー（お茶）：つまり、マイノリティーの構造としては戦前・戦後も同じと思っているのですか？

報告者：そうですね。運動史としてマイノリティーを見つめようとしているのは、一人で行うわけではない運動を通じてマイノリティーとしての自分のアイデンティティーを持つことができます。日本人ではないが日本に住まなきゃいけない在日朝鮮人の問題、日本人ではなく沖縄人と考える状況、曖昧なアイデンティティーが共通すると思い、戦前、戦後の連続性から考えたいと思います。

フロアー（お茶）：その二つの問題はどのように関係するのですか？別々に扱うわけではなく一緒に扱うことで何が明らかになるのですか。

司会：たとえば、日本のマイノリティーといえば、部落民、

アイヌの問題もあります。この中で沖縄人と比較する背景や選んだ理由は何でしょうか。

報告者：沖縄と在日朝鮮の問題は別の問題と思うかもしれませんが、戦前・戦後は分断されていないと考える状況から考えると…。

フロアー（お茶）：いわゆる括弧付きの「戦後体制」の問題としては状況が似ていると思いますが、それぞれの団体側から史料やオーラルヒストリーを用いて明らかにしようとすると、比較することは難しいと思います。積み直されてしまった問題としてマイノリティーの問題は共通した問題として存在しているというのは政策、体制の問題としてあります。ですが、団体や運動の側から明らかにしようとするのは、それを一度に二つしようとするのは、大変だと思いますね。

報告者：マイノリティーという問題、戦前・戦後は分かれていないという日本の社会、東アジアという 3 つを考えています。別々の問題として考えているかもしれませんが、在日朝鮮人と沖縄人を比較しようとしたのは…。

フロアー（お茶）：問題関心の最初の部分で、マイノリティーがいかにアイデンティティーを形成するのかということが関心の一つにあると思いますが、そのような精神的問題で言うと、本国の生活文化と切り離された中でいかに朝鮮らしさを持続していくのか。日本人ではなく在日としての意識を続けていくのかというアイデンティティーの形成の問題と、それを共有している人たちが、日本の中でどのように権利を獲得するのかという問題を切り離したほうが良いのではないかと思います。前者の方で言うと、日本政府との関係よりも、本国からどのような視線で見られていたのか、戦後の韓国との関係が含まれると思います。アイデンティティー形成という内面的問題を扱うとなると、在日朝鮮人と沖縄人とは益々離れていくと思います。沖縄人と本国との関係の中での葛藤は戦前からあるので、問題の起こり方が朝鮮人とは異なると思います。なので、ある時期からの政治運動としての共通性とか、結果として離れていくことを追うことはできると思いま

すが、アイデンティティー形成ということというテーマが広く、何故沖縄との比較なのかという問題が出てくると思います。

報告者：論文を書くにあたり、整理してみようと思いました。先生のご意見を聞いて、テーマが広がってしまうと感じました。

フロアー（お茶）：たとえば、比較を考えた時、沖縄人ではなく台湾からの人との比較はいかがですか。

報告者：沖縄人と在日朝鮮人と比較しようとしているのは、両者の中に祖国から離れて日本に住んでいます、朝鮮人らしさが身についています。自分は日本に住んでいても日本人でもなく韓国人ではないという曖昧な状況です。それが、沖縄人でも同様だと思います。沖縄人は自分を沖縄人、日本人とは言いません。日本に住んでいて日本の国籍をもっていますが、自分のアイデンティティーは日本人と沖縄人の間で曖昧です。台湾から来た人と比較するよりも近い関係があるのではないかと思います。最近、境界人の研究があり、境界人というのは沖縄人と在日朝鮮人のアイデンティティーを扱う表現だと思います。在日朝鮮人は、自分が日本人ではなく、韓国人ではなく在日朝鮮人として運動しています。そして、沖縄人も日本人が付与した名前として沖縄人ではなく、うちなんちゅとして活動しています。マイノリティーというのは近代では難しい問題と思うので、二つの運動史を通じて明らかにしようとするのは無理かもしれません。私がもともと設定した問題は、沖縄と在日朝鮮人のアイデンティティーの形成は違うプロセスかもしれませんが、その中で似通ったアイデンティティーが形成されたのは何故なのかと思ったためです。日本や東アジアの出来事との関係があると思います。私が最終的に考えたのは、日本の中で運動していることと、広く考えて東アジアで運動している人たちの動きは似ていると思いました。勉強を踏まえ、マイノリティーとしての運動史をみたいのです。

フロアー（お茶）：マイノリティーの形成過程で在日朝鮮人、沖縄人に似ている部分があるとして比較しようとなさっていると思います。日本の国内で沖縄人がどのような差別を受けているのかわからない点があるので、状況を教えていただきたいなと思います。それから、日本における一部の地域として沖縄があると思います。地域として本土に対して意識されるマイノリティーと、全国各地に居る朝鮮人が抱くマイノリティーは違うように思います。それを同じ土俵で比較することに違和感を覚えるのですが、いかがですか。

報告者：沖縄人に対する差別というのは、沖縄人の内面で日本人であるのに日本人ではないと思っていることから始まっていると思います。沖縄人に対して本島から生活改善運動として始まりました。歴史的に琉球という国を持っていたとして日本とは違う点を持っていたと思っていました。それが、1937 年になると自分たちの文化を改善しなければならなくなり、他の人と異なると排外されることになりました。日本に根ざすことを身に着けなければならないということで、沖縄の文化が禁止されました。国家からの監視、統制により日本人になるために改善しなければならない存在となりました。沖縄は本土と違い戦地となります。そこから日本人にならなければならないという心情を抱きます。今現在でも、本島、沖縄という言い方が違うように。

フロアー（お茶）：資料についてですが、プランゲコレクションは？

報告者：プランゲコレクションが作られたのは 1992 年です。45 年から 48 年、GHQ が日本を占領しながら検閲制度を設けていました。在日朝鮮人連盟の機関紙を沢山集めているので、そこから連盟の人々の動きを追うことができます。機関紙を沢山集めている史料集はないと思います。

フロアー（お茶）：まだ見ていませんか？メリーランドに行かなくても日本の国会図書館でマイクロフィルム化されているので閲覧できますよ。

パク ミンソン／淑明女子大学校大学院日本学科